

## 【予稿集】

# 看護学生が臨床実習のケースレポート作成過程で体験した学術情報探索上の困難

小野寺海帆<sup>\*,\*\*</sup>, 小橋結花<sup>\*\*</sup>, 富田美加<sup>\*\*\*</sup>

<sup>\*</sup>筑波メディカルセンター病院 <sup>\*\*</sup>前茨城県立医療大学 <sup>\*\*\*</sup>茨城県立医療大学

<sup>\*\*\*</sup>tomitam@ipu.ac.jp

根拠に基づく看護実践を行うために、看護学生には学術情報を活用する能力が求められている。本研究の目的は、看護学生が臨床実習のケースレポート作成過程で体験した学術情報探索上の困難について明らかにすることである。8名の看護学科4年生を2グループに分けて、オンラインによるフォーカスグループインタビューを行った。臨床実習のレポート作成における文献検索の実態や困難、看護基礎教育課程に対する要望などが抽出された。

## Difficulties Experienced by Nursing Students in Searching for Scholarly Information in the Process of Writing Case Reports during Clinical Training

Miho ONODERA<sup>\*</sup>, Yuka KOHASHI<sup>\*\*</sup>, Mika TOMITA<sup>\*\*\*</sup>

<sup>\*</sup>Tsukuba Medical Center Hospital

<sup>\*\*</sup>Graduate of Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

<sup>\*\*\*</sup>Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

### 1. はじめに

医療系学生の学術情報探索について、園原ら[1]による研究では、大学図書館への来館頻度や電子情報資源の利用頻度は上級生ほど高まっていることや、エビデンスを用いたレポート作成の必要性、時間的制約がある中で、利便性や簡易性を求めていること等について言及している。

一方、看護学生の学習状況では、迅速性を求められる臨床実習中における学術情報探索に戸惑いが生じている。特に短期間で提出する必要がある実習時のケースレポート作成については、多くの学生が困難を経験している。

### 2. 研究目的

本研究の目的は、看護学生が臨床実習のケースレポート作成過程で体験した学術情報探索上の困難について、具体的に明らかにすることである。

### 3. 研究方法

#### 3.1 データ収集方法

2021年8月～9月に、Web会議サービス Zoom によるフォーカスグループインタビューを2セッション実施した。

8名の看護学生が4名1組として割り振られ、インタビューに参加した。インタビューを含め、全員が4年生であり、3年次の臨床実習時にケースレポート作成を経験していた。

#### 3.2 インタビュー内容

ケースレポート作成時に使用した文献や学術情報探索行動の実際、図書館サービスの利用状況、カリキュラム等について質問した。

なお、本研究は、茨城県立医療大学研究倫理審査委員会(受付番号 993)の承認を得て実施した。

## 4. 結果

作成した逐語録から 443 のコード、116 サブカテゴリ、27 カテゴリを抽出した。学生の語りから得られた結果について、概要を表 1 に示す。

表 1：学生の語りから得られた現状

No.	項目	要点
1	臨床実習のレポート作成における文献検索の実態	冊子体・デジタル双方の情報源に関する利用傾向
2	文献検索における工夫や困りごと等	ケースレポート作成時の障壁，工夫した点，現在との相違点
3	情報探索に関するカリキュラムへの示唆	初年次の情報教育に関する活用機会の不足や認識不足
4	学生の情報探索行動における図書館の役割	学生にとっての図書館の有用性，図書館サービスのニーズ

## 5. 考察

### 5.1 臨床実習のレポート作成における文献検索の実態

レポート作成では、冊子体の図書・雑誌等や、電子情報源（CiNii, Google Scholar, J-STAGE, 最新看護索引 Web, 診療ガイドライン等）を活用していた。臨床実習中の時間的制約がある中でもウェブサイトを活用して、より学術的な文献を求める努力をしているため、検索時に全文閲覧可能な電子情報源が求められていると考える。

### 5.2 文献検索における工夫や困りごと等

文献データベースや図書館の利用方法に関する情報不足、論文の選択や精読における時間不足があり、自力で試行錯誤していたと考える。一方、授業資料の活用、レファレンスサービスの利用、友人への相談により、時間的制約の中でも工夫が

みられた。文献の検索過程や入手に際し、基本的な知識やスキルが重要である。

### 5.3 情報探索に関するカリキュラムへの示唆

初年次の情報リテラシーに関する学習内容は、実践的なスキルにまで到達できず、履修後の活用機会がないため、3年次以降になってようやくその授業の重要性を認識するという実態がある。

臨床実習等の学習過程で十分に活用していくためには、看護学の専門科目との連動による実践が不可欠である。

### 5.4 学生の情報探索行動における図書館の役割

学生は、閲覧や文献検索のほか、学習スペースとしても図書館を利用している。さらに、図書館の有用性は各種資料の入手しやすさに左右されるため、電子資料等へのニーズについて対応が求められる。また、図書館の利用方法や文献検索講習会等について、学生の理解度に応じた広報の強化が必要である。

## 6 結論

看護学生のフォーカスグループインタビューを行った結果、臨床実習のケースレポート作成過程で体験した学術情報探索上の困難及びそれらに関連する今後の課題が明らかとなった。

### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP18K17462 の助成を受けた成果の一部である。

### 注・文献

- [1] 園原麻里, 西條智架, 三谷三恵子. 慶應義塾大学信濃町メディアセンターにおけるスタディライフ調査報告：学生の学習実態に基づいたサービス改善の試み. 医学図書館. 2013, vol.60, no.4, p.445-458.